

附圖、第二十、第二十二に移つて見れば、その石の玉垣には彫刻はないが、後に足した高い門には上から下まで浮彫を施してある。之等の門を造つたのは比較的遅れてゐるが、紀元前一世紀にあるので、その石梁全面を覆うてゐる色々の構圖で、已に技巧が極めて進んでゐる事が知れる。嘗てかのフッガソン Ferguson が其學説を支持する上に作つた統計に従へば、塔は三十二回以上、樹は六十七回も出てゐるが、輪は六回に過ぎないとしても、之は後に述べる特殊の理由に依るが、之等の點を調べて見る事は一層興味がある。之は、文獻の示す所に依つて、又大聖都の巡禮をして、佛教に關する古い題材の根柢をなすものを、全體に促へて見れば、極めて明瞭になつて來る。

佛滅後四百年以上も後の遺物に、昔の記念品製作者の古い幼稚な形式が認められる場合に(本書挿圖第一)猶之が古代的原始的のまゝであるにしても、兎も角その意味は全然變つてゐて、これでは最早や單なる聖都の記念のものではなく、印度中に之が擴がる爲に、其の部分的地方的意義は失はれ、一般の圖像的價值を有する事になり、爾來之が佛陀の大奇蹟を表現するものと考へ